

授業研究

大学がある「飯能」をテーマとした映像制作の実践と課題

問島貞幸

【要旨】 本稿ではゼミ活動の一環として新たに取り組んだ、大学がある飯能をテーマとした映像制作の実践内容を報告し、今後の授業について考察と提案を行う。

【キーワード】 映像制作 取材 ドキュメンタリー グループワーク 社会人基礎力 飯能 消滅可能性都市 課題解決 地域の問題

1. はじめに

映像制作がもたらす能力開発（社会人基礎力の向上など）について実践研究を行っている筆者は、様々な映像作品を主体的に制作することで、自ら考えて行動できる人になるよう学生を指導している。

学生の就職活動の開始時期が年々早まっていることから問島ゼミでは、3年次のゼミ活動が重要だと捉え、個人による自分の日常を映像で表現するセルフドキュメンタリー作品、個人による“いま会いたい人”に交渉し、取材するドキュメンタリー作品、そしてゼミ合宿のグループによる“夏”をテーマにした作品を制作している。これらの作品を集めて毎年10月末に行われる学園祭で一般市民に向けてゼミ作品上映会を実施している。

上映会後の11月からの3ヶ月間は、学生個々で映像制作に関する課題を決めて、取り組んできた。しかし、この間は学生のモチベーションに関して個人差が大きく、もっと有効なほかの取り組みがあるのではと以前から考えていた。

そこで、新たに大学がある「飯能」をテーマにした問題解決型の作品を制作することで、学生の映像制作の経験値がさらに上がると考え、2019年11月、初めての試みとして「飯能」をテーマにした作品をグループで制作してみることにした。

2. 方法

作品テーマのキーワードは、「飯能と若者」とした。具体的には、最初の取材で、消滅可能性都市として名前が挙がっている飯能市に住む若者たちにインタビュー取材を実施し、現在を生きる若者の人生観や飯能という街の良さ、問題点を明らかにしていく。その後、取材させていただいた人の中からさらに追加取材を試み、その人のリアルな飯能での生活に迫ることで、飯能の良さや問題点を、映像を通じて明らかにし、さらにどのようにしたらもっと魅力的な飯能市になるのか、そのための課題はどのように解決できるのか、学生たちなりに考えて提案できないか、と考えた。

活動スケジュール

これまでの3年次のゼミ活動における映像制作は表1の通りである。

9月末に秋学期が始まると10月下旬のゼミ作品上映会まで、作品の編集作業や上映会のポスターやチラシ制作、上映会場設営、上映会リハーサルなど直前まで作業に追われる。そのためまず秋学期最初のゼミの時間に「飯能と若者」をテーマにした作品を11月から制作することを学生に説明した。そして詳しい制作打ち合わせは、

表1 間島ゼミ3年次映像制作スケジュール(2019年)

4月下旬～5月中旬	セルフドキュメンタリー制作(個人)
5月中旬～10月中旬	会いたい人に会いに行くドキュメンタリー制作(個人)
7月～10月中旬	夏をテーマにしたゼミ合宿作品(グループ)

10月27日のゼミ作品上映会終了直後に行った。打ち合わせの内容は以下の通りである。

事前打ち合わせ

まず企画の内容、狙いについて説明した。そして2人1組のチームを作り、20代～30代前半くらいの男女にインタビュー取材すること、年齢・性別などなるべく偏らないようにすること、最終的に編集で10人以上使えるよう取材することを伝えた。さらに取材の手順、作品の構成について説明した。

◆取材の手順

①飯能市内で道ゆく人に声をかける②自己紹介し、企画趣旨を簡単に説明し、インタビュー取材のお願いをする。インタビューはなるべく具体的に話してもらう。取材したVTRは学内でのみ流すこと、ネット上にアップすることはないことを説明する③インタビューは名前、飯能在住歴、職業(職種)、飯能の良いところ、飯能の問題点、暮らしにくい点、どうすればもっと魅力的な街になるかなどを聞く④最後に取材承諾書に名前を書いてもらう。

◆作品の構成

企画趣旨 (30秒)	インタビュー (10人以上)	場合によっては、その人の生活ぶりに密着取材する	まとめ
---------------	-------------------	-------------------------	-----

チーム編成については学生同士の話し合いで決めるよう伝えた。また各チームで「飯能市」に関する事前リサーチを必ず行ってから取材に臨むよう伝えた。

取材

取材は、多くの若者が集まり、効率よく取材できることが期待される飯能まつり(11月2日・3日)で行った。現在、3年ゼミ生は11人いるが、そのうち1人は個人的な理由でこの2日間とも参加できないため、残りの10人で2人1組の5チームを編成し、取材を行った。なお取材開始時間、取材場所等は各チームに任せた。一人はカメラ担当、もう一人は声がけ・インタビュー担当で、取材はどちらか一方の役割に偏ることなく両方経験するよう伝えた。

撮影は最近ではスマートフォンで行うことも多いが、今回は大学のビデオカメラ(ソニー18MK-AX45)を各チーム1台ずつ割り当て取材した。

街頭インタビューはほとんどの学生にとって初めての経験であった。最初、声をかけるのに苦労したようだがどのチームも諦めないで声をかけ続け、最終的に、編集で使える10人以上にインタビュー取材することができた。

編集・作品完成

取材本番直後11月4日のゼミの時間で作品の構成について詳細な説明を行った。そして作品の上映会は12月9日のゼミの時間に行うことを決めて、あとは各チームのスケジュールに任せて編集することにした。編集作業はApple社のFinal Cut Pro Xで行った。

ゼミの時間は、プレゼンやディスカッションの場と考えているため、通常は編集に時間を当てることはしない。だが、今回はスケジュールがタイトなため、ゼミの時間も使って編集することになった。しかし、それだけでは時間が足りないため、チームによってはゼミ教室が空いている時間

に編集したり、時間外で個人のパソコンで編集したりした。

学生たちは、この取り組みの前の、会いたい人に会いに行くドキュメンタリーで企画から撮影、編集まで約半年間かけて制作する経験を積むことで、コミュニケーション能力をはじめとした社会人基礎力や作品の読み解き能力などの向上が見ら

れる。制作過程において、通常は編集の途中で筆者が作品チェックし、アドバイスを行うのだが、今回は学生の映像制作能力がどのくらい向上したのか見極めるため、作品完成まで徹底的に学生同士で話し合い、いかに作品を完成させるのか、期待して見守ることにした。そして最終的に約6分の5作品が完成した。

表2 制作スケジュール

10月27日	企画についての説明
11月2日	取材本番
11月4日	作品の構成について説明
11月5日～ 12月8日	追加取材、編集
12月9日	ゼミ内上映会



写真1 小林美・稲村チーム作品



写真2 針田・洛チーム作品



写真3 石原・松野チーム作品



写真4 大縄・高山チーム作品



写真5 小林萌・須藤チーム作品

上映会・委託生授業

上映会は12月9日の3年生ゼミの時間に行った。各作品を上映する前に各チームの代表が、作品の見所や苦労した点など話してもらった。学生たちはそれぞれの作品を見た後に、インタビューの内容や撮り方、全体構成、ナレーション、テロップ表現などについて感じたことや疑問などアンケート用紙に記入し、最後に発表してもらった。

また12月24日に行った飯能市役所、日高市役所、入間市役所の職員の方々が受講した大学院の委託生授業で「飯能と若者」というテーマで、学生が制作した作品を上映し、ディスカッションを行なった。

作品を視聴した市役所の方々から、「まるでテレビ番組みたい」「一部インタビューの声が聞きとりにくい」「インタビューに答えている人の詳細テロップがあるともっと引き込まれると思う」など貴重な感想やアドバイスをいただいた。また作品に登場する若いお母さんの「子供と遊ぶ公園が少ない」という声に対して、「飯能市内には実は公園がたくさんあって、市民に対してがんばってPRしているつもりだったが、意外と伝わっていない、と痛感した」や、小さな子供のいる家族から「休日にもっと家族で遊べる商業施設があったら良いのに」との声に対し、それぞれの地域の現状について報告したり、実現させるためにどのような問題があるのかなど、わずかな時間ではあったが、学生の作品をきっかけとして、かなり具体的で有意義な時間を過ごすことができた。

3. 学生の声

作品を完成させ、上映会を終えた学生たちから、今回の取り組みについて振り返ってもらった。

「私たちは18名の若者に取材することができたが、それでも映像素材が足りなかったため、使えるインタビュー映像が限られていた。もっとたくさんの人に取材し、質問を工夫して有益な情報を

含む素材を集められれば違った視点で制作できたかも知れない。」

「私が本作品の制作過程の中で学んだことは、仲間と助け合うことである。綺麗事に聞こえるかもしれないが、今回の制作でいろいろな面で本当に助けられた。飯能在住の人を見つけても取材を拒否されるなど、私たちはいまいち軌道に乗れず、取材相手を見つけるのに時間がかかっていた。そこですでに取材を終えた同じゼミの女子グループに助けを求め、なんとか取材を終えることができた。あの助けがなければ、その日のうちに取材を終えることはできなかっただろう。本当に感謝している。」

「インタビュー回答の母数が多いため飯能市民がどのようなことを考えているのか、より多くの人の声を聞くことができ、飯能の良い点、改善点などの傾向を知ることができた。しかし、せっかく面白い回答が得られてもその回答に対してあまり深く追求できなかった。臨機応変に質問する力がないと実感した。」

「今回の企画は『飯能の未来』という固い内容であるため、終始飽きさせないような構成が必要不可欠だった。そこで私たちはニュース番組の特集という形で制作することにした。メディアセンターのスタジオを使用し、クロマキー合成等、初めての撮影、編集に挑戦した。テロップやインサートカットを多く入れ、ワイプ画面もつけるなど、テレビのニュース番組風の編集を心がけた。そういった構成から、飽きさせない映像が制作できたと自負している。さらに、飯能が消滅可能性都市から脱却し始めているという現状を、データを使ってわかりやすく伝えられたと思っている。」

「見て飽きないようなテンポの良い編集を心がけた。編集を2人で分担するのは難しいため、どうしても編集は1人での作業になってしまいが、

事前に作品の構成とナレーション内容をしっかり2人で考えることができ、私が苦手なナレーションをベアの人をお願いしたこともあり、あまり大きな負担には感じなかった。」

「今までの私は、全て自分でやっていた。しかし、本作品の制作では、仲間に進んで仕事を任せる私があった。今回の制作過程で、助け合うことで余裕が生まれ、その結果納得のいく作品が短期間で完成したことは今までにない貴重な経験だったといえる。今までの助けを求めることは恥と考えていた自分は消え去り、新しい私と出会えた気がした。成長を実感した。」

4. まとめ

完成した5作品はどれも視聴者を意識した作品に仕上がっていた。中には取材相手に大胆に迫って、迫力あるインタビューを撮ったり、最後まで興味を持って見られるように構成を工夫したり、夕方のニュース番組のようにスタジオ部分を別に

収録して、取材VTRと合体させて見せたり、様々な工夫が見られた。この点においては3年次の映像制作の経験による能力の向上の成果と言える。

その一方で、5作品とも当初計画していた、追加取材で、ある特定の人リアルな飯能での生活に迫ることで、飯能の良さや問題点を、映像を通じて明らかにし、さらにどのようにしたらもっと魅力的な飯能市になるのか、そのための課題はどのように解決できるのか、学生たちなりに考えて提案するまでに至らなかった。それは企画から作品完成まで約1ヶ月で行う、というスケジュールに問題があると考え。引き続き取材を進めるべきではあるが、3年次の後半の時期は、本格的な就職活動に突入してしまい、なかなか作品制作に集中しづらいと言える。4年次では卒業制作の準備が始まる。よってこの取り組みを今後も進めていくためには3年次の早い段階で開始する必要がある。ここであらためて3年次の活動内容を検討すべきだと考える。また制作した作品はなるべく多くの人々の目に触れられるよう、上映の場を拡大するために飯能地域の方々と連携していきたい。

Practice and issues of video production on the theme of Hanno city

By Sadayuki MAJIMA

[Abstract] I will report on the contents and issues of video production on the theme of Hanno City, a university, which is a new initiative of seminar activities.

[Key Words] Video production, Coverage, Documentary, Group work, Basic skills of working adults, Hanno, Extinct city Problem solving, Local problems